

## 南アフリカ産アボカド 欧州でチャンス、日本へは試験輸送

[FreshPlaza 2024年3月15日](#)

南アフリカ産のアボカドは先週、アボカドが異常に不足していたヨーロッパ市場に到着した。一方、米国に供給できるメキシコ産アボカドが少ないことが予想されるため、ペルーは当然、パナマ運河を通してヨーロッパまで行くよりも、北米の品不足を埋めることを好むであろう。

南アフリカ・アボカド生産者協会のエドリアン・エルンスト会長は、「このような現実を考えると、欧州のアボカド市場ではペルー産の圧力が少なくなり、ペルー産が存在感を示すのは通常よりも遅い時期からになると予想している。ペルーでは天候上の問題もあり、作柄に影響が出ている」と述べた。(以下「」は同氏の発言)

しかし、ロシアの戦争が欧州の平均的な消費者の財布に影響を及ぼし、彼らの可処分所得や支出パターンに影響を受けていることから、状況は複雑化している。

南アフリカの収穫量は、今年は隔年結果の表年に当たる。今シーズンの輸出量は4kg箱換算で2千万～2,500万箱(8万～10万トン)と推定されている。2023年の輸出量は1,800万箱であった。

### ヨーロッパからの引合いがかなり強い一方、中国に弾みが見つからない

南アフリカ産グリーンスキン・アボカドの重要な市場の一つであるロシアが恐らく安定したままだと思われる一方、ツァニーン市に本拠を置くアレクステ農場の共同経営者でもあるエルンスト氏は、南アフリカ産アボカドの輸入を昨年許可したばかりの中国に、業界全体として大量の出荷を割り当てることは予想していない。

「中国で需要開拓の余地があることは間違いないが、現在はそれほど大きな市場ではない。また、中国に出荷するのはかなりリスクの高い提案である。中国に出荷する際の要件と出荷手続きを考えると、業界はまだ足場を固めなければならない。」同氏は、ヨーロッパでの商機がこれほど有利に見える今シーズン、中国にアボカドを送る動機付けはあまりないと指摘する。

もう一つの良い知らせは、日本市場が開かれたことである。「業界内では、6月ごろに日本向けに試験出荷を行う計画がある。そこでの課題は、果実を傷つけずに低温処理を行うことである。」

そして、日本におけるアボカドの可能性を伸ばす取組みが始まる。エルンスト氏は、西洋人の予想に反して、日本では伝統的な寿司にアボカドを使用するのは一般的ではないと述べている。「しかし、日本人は食に対するアプローチにおいて非常に独創的であり、我々は彼らと手を組んで、我々のアボカドが合うのは彼らの料理のどこなのかを見極めたいと考えている。」

### アボカド消費量の世界的な格差

同氏は、米国のような国のアボカド需要は、南アフリカの年間総収穫量をわずかに数週間で吸収する可能性がある一方で、中国やインド(南アフリカはまだ市場アクセスがない)のようなもっと人口の多い国でも、アボカドの消費量は「驚くほど少ない」ことを観察している。

他方で、東アフリカのアボカド産業の発展が注目されている。南アフリカ国内の出荷シーズンが始まる前に、南アフリカの小売業者がタンザニア、ケニア、モザンビークからアボカドを輸入することは、国内の消費を増やすチャンスであると同氏は考えている。「これらの国から輸入されるアボカドの量は今のところ比較的少なく、また国内の出荷時期との重複も比較的少ないので、国内のアボカド生産者はあまり影響を感じないと思う。」

### 出荷は問題なく開始

アボカドの輸出に際しては、南アフリカの港、特にケープタウン港の問題から逃れられない。「前向きな動きは色々あるが、出荷状況を改善するような大きな成果は得られていない。今のところは問題ないが、運用上の変更が間に合わない限り、柑橘類の出荷量が増えたとすぐに同じ問題が再び発生することは間違いない。」

業界の出荷量がいつ頭打ちになるかについて同氏は、「この業界の天井がどこにあるかはわからないが、それが近くないことはわかっている」と答えている。(一部省略しました。)

執筆者: キャロライズ・ハンセン